

前回は「むり」という語句について考察したが、人間が親神の胸の内について「何も知らない」のは「無理でない」(道理である)が、親神がそのことを「ごんねん」に思うこともまた「無理でない」と説かれていることや、そうした「親神の胸の内を説かないままに、人に来いと言う」ことが「無理に来い」の含意するところであると示した。また、教祖の長男・秀司に関しては、親神に理由があって秀司に苦勞を掛けたという意味でその苦勞には道理があり、それによって疑う心が起きるのも道理(「無理でない」)であるが、それゆえにこそその疑いの心を晴らすのもまた道理であると解されることを述べた。

「みかぐらうた」における「むり」の用法

ところで、この「むり」という語句は「みかぐらうた」における基本語彙の一つでもある。そこで、「みかぐらうた」での用法とも合わせて考えてみたい。「みかぐらうた」では以下の6カ所で記されている。

そのはずやといてきかしたことハない
 しらぬがむりでハないわいな (み:よ2)
 むりなねがひはしてくれな
 ひとすぢごゝろになりてこい (み:三6)
 むりにどうせといはんでな
 そこはめいへのむねしだい (み:七6)
 むりにでやうといふでない
 こゝろさだめのつくまでハ (み:九6)
 むりにとめるやないほどに
 こゝろあるならたれなりと (み:十一6)
 むりにこいとはいはんでな
 いづれだんへつきくるで (み:十二6)

「よろづよ八首」は「おふでさき」の冒頭八首と語尾以外同じであるが、「むり」は述語的に用いられている。それ以外としては、三下り目のみ「無理な願い」と形容詞として用いられて、残りは「無理に」と副詞として「言う」「出る」「止める」をそれぞれ修飾している。とりわけ、「おふでさき」三号の6と九・十二下り目は「無理に言うな」という形式で用いられている。

内容としては、「よろづよ」では「おふでさき」と同様に、「何も知らない」が道理であることが逆説的に示されている。次に、三下り目では、まず上の句で「無理な願い」を制されて、下の句でただ一すじの心になって来いと述べられていることから、ここでの「無理な願い」とは、二筋三筋の心つまり“浮気心”からくる願いを意味していると思われる。次に、七下り目では、「無理にどうしろとは言わない」と述べたことを受けて、「それぞれの心次第である」と論ざれていることから、ここでの「無理」とは、“人の心を蔑ろにすること”といえよう。続いて、九下り目では「無理に出ようと言うのではない」と七下り目と類似してはいるが、こちらは「出る」という人間の行為に焦点が当てられており、その上で、「心定めをつくまで」と説かれて

いることから、ここでの「無理」とは“定まらない心”を示していると解される。そして、十一下り目では、「無理に止めるのではない」と人間の止めだてを制されて、「心あるなら誰なり」と詠われていることから、ここでの「無理」とは、七下り目と同様に“人の心を蔑ろにすること”と取ることができよう。最後に、十二下り目では、先述したように「おふでさき」と類似して「無理に来いとは言わない」と述べ、「いづれだんだんと付いて来る」と論ざれており、ここでの「無理」は“理を説かないままに今すぐ”というくらいの意味に読み取れる。

以上から、「みかぐらうた」における「むり」の意味内容は、①道理を逆説的に示すこと(よろづよ・十二)、また②人間の浮気心や定まらない心(三・九)、そして③人の心を蔑ろにすること(七・十一)とまとめることができる。

「おふでさき」における「むり」

これらを参考にして、ふたたび「おふでさき」の「むり」を考察してみよう。

そのはずやといてきかした事ハない
 なにもしらんがむりでないそや (一2)
 こんものにむりにこいとハゆうでなし
 つきくるならばいつまでもよし (三6)
 月日よりなにもみちすじきいたなら
 このごんねんハむりであるまい (七91)
 それゆへに月日ゆう事なに事も
 うたこふているこれむりでない (十二120)

まず、第一号2は先述したように、道理を逆説的に示しており、それは「人の心」を慮つての表現と捉えられる。次に、三号6で「無理に来い」には「胸の内を説かずに来い」が含意されていることを示したが、それというのも「来ない者」の心への配慮を示していると解され、また、「浮気心」や「定まらない心」のままこの道に付いて来ることへの憂慮が窺える。言い換えれば、この道は「一すじ心」で付き来るならば「いつまでもよし」の道なのだといえよう。そして七号では、親神が、人間がその胸の内について「何も知らない」ことを「ごんねん」に思うことも一つの道理であると説かれているのだが、ここでは、そうした道理が納得できるような人間の心の成長が示されているといえよう。最後に、十二号で「疑うのも無理ではない」と、長年苦勞を掛けた人間・秀司の心への厚い配慮がなされている。

こうして「みかぐらうた」を経由して考察してみるとより明確になるが、「おふでさき」中の「むり」という語句には、人間の心への配慮が込められており、その上で親神の胸の内を伝えて、道理を示そうとしている態度が読み取れる。「いづれだんへつき来る」(み十二6)ようになり、「付き来るならばいつまでもよし」(三号6)となるように、“無理なく・条理を尽くして”その親心を伝えようといわれている。